土　岐　市　教　育　研　究　所
Ｔ　Ｅ　Ｌ　0572-54-1111　(内281)
Ｆ　Ａ　Ｘ　0572-55-6310
ﾒｰﾙｱﾄﾞﾚｽ　kyoiku@city.toki.lg.jp
所　報　Ｎｏ．５４４
発行責任者　所　長　橋　本　勇　治
発　行　日　平成３１年　３月１１日
題　字　山田　恭正　教育長

「シビック・プライド」

土岐市教育研究所長　　橋　本　勇　治

今年度の「岐阜県ふるさと教育表彰」において、濃南中学校が優秀賞、妻木小学校が奨励賞を受賞しました（西陵中学校も応募してくださいましたが、惜しくも受賞を逃しました）。濃南中学校は、地域に残る歴史的な街道（「中馬街道」）を核として地元の伝統文化に触れ、郷土の人々の生き方から自己の生き方につなげる「中馬の時間」が、また、妻木小学校は「３つ（地域の人・産業・歴史）のつながり」の視点から系統的に学習を組み立て、地域や幼稚園との連携を大切にして学びを深めている「ひかり学習」が認められての受賞となったようです。次期「岐阜県教育ビジョン」の重点の一つが「ふるさと教育」であることは皆さんもご承知のとおりですが、二校はその趣旨にぴったりとあった秀逸な実践を報告していました。教育委員会としてもとても鼻が高く、誇らしい気持ちで一杯です。

年末に岐阜市で開催された「平成３０年度中学生学校給食選手権」では、肥田中学校が４年連続で二次審査（実技審査）に進出し、見事「ふるさと学校給食賞」を受賞しました。今回のテーマは、「地元食材で苦手克服！給食」で、苦手な食材でも地元の食材を使っておいしく食べられるようにすることを目指したそうです。土岐市産の大根や小松菜、白菜、ねぎなどのほか、土岐津町のみそ、肥田町のはちみつも調達しました。ただ、給食献立を作り上げるだけでなく、地元と食材の関係について深く学んだ成果を、この輝かしい結果につなげたことが何よりも素晴らしいと感じています。

先日、ネットサーフィンをしていて、「シビック・プライド」という言葉に遭遇しました。既に世の中で市民権を得ている言葉なのかどうかもわかりませんが、学校でよく使う「郷土愛」の一歩進んだ形だというような記述を読んで、興味が沸きました。その「シビック・プライド」とは、日本語の「郷土愛」といった言葉と似ていますが、単に地域に対する愛着を示すだけではないところが違うそうです。「シビック」には権利と義務を持って活動する主体としての市民性という意味が込められており、自分自身が関わって地域を良くしていこうとする、ある種の当事者意識に基づく自負心のようなものを包含しているのだそうです。（受け売りで恐縮です。）

意図的・継続的に深い学びを実現してきた受賞校の取組はどれも、「郷土愛」の育成に確かにつながっていると思われます。その一方で、この取組を「郷土愛」と一言で済ますには、あまりにもったいないと常々感じていました。何となくすっきりしない、もやもやした気持ちを払拭してくれたのが、この「シビック・プライド」という言葉でした。

先日、町内の製陶工場見学に訪れた小学３年生が、訪問先で見事な「プライド」を見せたという話を耳にしました。複数の窯元を回って、それぞれの現場の雰囲気を肌で感じ、製造工程を自らの目で確かめながら、そこで真剣に働く方々から説明を聞いてきたそうです。説明に対して彼らは、「（他の窯元と比較しながら、ここの窯元の）本焼きは何度ですか？創業して何年ですか？どこの土を使っているのですか？」などと根掘り葉掘り、実に細かな質問を続けました。彼らは既に、陶器を作る作業工程を全て学んでおり、素焼きと本焼きがどんな作業で、どう違うかぐらいはとっくにマスターしています。そして、それぞれの窯元には、焼きの温度ひとつとってもその窯元ならではの特徴や個性があり、たとえ大量生産中心であっても、一つ一つを手作業で作っていても、どちらにも良さがあることをよく知っています。さらに、どの窯元にも、自らの仕事や我が町の産業を支えているという「プライド」があることをしっかりと理解しているのです。そんな各窯元のそれぞれの「プライド」が、子供たちの「シビック・プライド」の基盤形成にも、確実につながっていることを実感し、とてもうれしくなりました。子供たちの今後の更なる成長を期待せずにはいられませんでした。

『願いを共有』
コミュニティ・スクール研修会
土岐市立妻木小学校

言語活動指導者養成研修　研修報告

「言語活動の充実」で育もう！　～（　　）力・（　　）力・（　　）力～

泉小学校　　廣島　由美子

≪はじめに≫

「言語活動の充実って、話合い活動を増やすこと？」

１１月に秋田県教育センターで行われた「言語活動の充実」についての研修に参加する機会をいただきました。４日間の研修を通して学んだ中で、今、私達が意識して大切にすべきだと感じたことの一部を報告いたします。

１　「言語活動の充実」に向けた取組の現状

≪全国的な現状≫

○生きる力を育むことを目指した教育活動の中で、言語活動の充実に向け、話合い活動が意識的に仕組まれるようになり、**実際に「話合い活動」の機会も増えた。**しかし現状は…？

➡△言語活動の**目的意識が不明確**
△教科等の**学習過程における位置付けが不明確**
△単なる**話合いにとどまり形骸化**している
△話合い活動を**仕組むことが目的化**している

「言語活動の充実＝話合い活動を行う」ではない！

２　「言語活動」とは？「充実」とは？

◎言語による様々な活動のうち、思考力・判断力・表現力を育むもの。

具体的には…

① 体験から感じ取ったことを表現する。
② 事実を正確に理解し伝達する。
③ 概念・法則・意図などを解釈し、説明したり活用したりする。
④ 情報を分析・評価し、論述する。
⑤ 課題について、構想を立て実践し、評価・改善する。
⑥ 互いの考えを伝え合い、自らの考えや集団の考えを発展させる。

記録
要約
説明
論述
話合い
等の
活動

今求められている言語活動の「充実」は、言語を駆使した（自由自在に操れるような）学習活動。「話す」「聞く」「書く」「読む」つまり…

▲教師の説明や解釈を児童が黙って「聞く」
▲教師が板書したことをひたすら「書き」写す

ではなく、

◎児童一人一人が、**思考力・判断力・表現力を働かせ、言語を駆使しながら問題解決的な学習をする**こと。

３　授業の中で大切にしたいこと

実際に参観した算数の授業では、例えば次のようなことが大切にされていた。

≪教材研究≫

・単元指導計画の中で、単元を通し、**一貫した言語活動を段階的に仕組む。**
・単元の中で、**前時や前単元とつなぎながら、見方・考え方を育てる。**（子ども達が課題や見通しをもち、問題解決に向かえるように。）

≪児童の実態把握・見届け≫

・**児童の実態や思考の流れ**をつかむ。その上で**教師の発問や言葉**は、児童の思考を遮らず、想起させる、つなげる、膨らます等…を意識する。

≪児童の学び方≫

・**ペアトーク（交流）では**、ただ話すのではなく、**必ずコメントを返し合う。**（相手意識、目的意識、視点を明確にしている。）
・学習内容や方法を**振り返る場**を位置付ける。

４　今すぐ、実践できる「聞く力を付ける指導」

①　聞き方『あいうえお』　＜態度 version＞

あ…　相手を見て
い…　言いたい中身を考えて【理解】
う…　うなずきながら【反応】
え…　鉛筆を置いて
お…　終わりまで

②　聞き方『あいうえお』＜思考・感情 version＞

あ…　あっ、そうか。【理解・納得】
い…　いっしょだ！【比較】
う…　う～ん、わからない【理解困難・疑問】
え…　え？そうなの【発見・出会い】
お…　おもしろい！【感動】

①の態度指導はよく見かけるが、②の**思考や感情を意識**した指導はなるほど！と思った。子ども達が**思考や感情の表出**を意識することで**「やりとり」**が生まれ、双方の思考が深化していく。子ども達が意識することで話合いが深まり、よさが実感でき、聞く力が身に付いていくよう指導したい。

『共有フォルダ→泉小』に教室掲示用があります。
よろしければコピーしてご自由にお使いください！

≪おわりに≫

日々あたりまえに行っている活動の中で、私達教師が、**何を願い、何を意識し、どんな活動を仕組むのか**が大切であると改めて実感しました。少し立ち止まって考えるきっかけ、子ども達と創る授業のヒントにしていただけたら嬉しく思います。

「私の教育実践」

「美しい心」を育む道徳教育

泉西小学校　教諭　吉岡　由紀子

「美しい心」。これは､本校の校訓です。様々な体験を通して、児童の「美しい心」が磨かれるようにこれまでも取り組んできましたが、今年度は、道徳の学習を要として、児童一人一人の「美しい心」を育てることを目指してきました。道徳が教科となり「考え、議論する道徳」と聞いても、何をどうしたらいいのか手探りの状態の中、様々な方法に挑戦しようと考え取り組みました。

本校の児童の実態として、捉えた道徳的価値を自己の生き方や、実践しようとする意欲に結び付けて考えることに弱さがあると捉え、研究主題を「自己を見つめ、よりよい生き方について考える児童の育成」としました｡授業では、「対話」を通して、道徳的価値についての考えを深める授業を目指してきました。ペアやグループでの話し合い、登場人物になりきって心情を考える役割演技を設け、自分の立場を明確にして話し合うために道徳ノートやネームプレート、赤白帽子等のアイテムを使った工夫も行いました。授業以外のところでは、帰りの会のよいことみつけの時間を充実させるために道徳的価値と関連させて仲間の良さを話し合ったり、行事や日常生活を道徳の授業と関連させながら実施したりすることも大切にしてきました。

「道徳は自分の生活をよくしてくれる」。これは、道徳アンケートに書かれたある児童の記述です。職員一丸となって取り組んだ日々の積み重ねがこの言葉につながったのではないかと考えます。黙々と掃除に取り組む姿や仲間の良さから学ぼうとする前向きな姿にも表れていると思います。まだまだ、課題も多いですが、今後も道徳の時間を要として、児童の「美しい心」を磨いていきたいと思います。

「私の教育実践」

「短歌」を通して授業を考える

土岐津中学校　教諭　加藤　理名

今年から初めて中学校に勤めることになった。中学生との関わり方，専門教科での授業に日々戸惑いを感じていた。そんな中，６月に行われる土岐市教育研究会での授業公開が決まった。国語の授業自体，手探り状態であったが，生徒に自分の考えや思いを表現して欲しいという願いから「短歌」の授業を行うことに決めた。

短歌は三十一字という限られた文字数の中で，よりその時の心情・情景にあった言葉を選定しなければならない。しかし，私にはどのような規準で作品を指導・評価するとよいのか，知識が浅く不安であった。そこで，土岐市で短歌に携わっている方を講師として招くことにした。短歌を始めたきっかけや短歌作りのこつを話していただいたことで，「短歌」と聞いて身構えていた生徒も，思い思いの表現で短歌を作ることができていた。また，講師の方が「短歌は写真と同じように『その瞬間』を切り取って残すものだ。」と言ってみえた。その話によって，生徒自身が「その瞬間が伝わるように言葉を選ぼう。」と，それぞれが思いをもって言葉を推敲することができた。

私自身も，講師の方と短歌を添削していくことで，これまで感覚で「よい」と感じていたことも，何がどう「よい」のか説明できるようになってきた。また，地域にこんなにも素敵な短歌を作り，知識をもった方がいらっしゃるのだということに初めて気づき，土岐市の文化に触れることができたことに嬉しく感じた。

中学校での勤務が始まり１年が経とうとしている。今でも国語の授業の進め方を試行錯誤している。しかし，６月に行った短歌の授業を通し，「単元でつけたい力」を自分なりにもって授業ができるようになった。来年度も，学ぶ姿勢・挑戦する気持ちを忘れず，教材研究に励みたい。

平成 30 年度　学力向上推進委員会　活動報告

学力向上推進リーダー　久野　雄司

○土岐市「家庭学習の手引き」小学生版を作成しました。

児童生徒の学力向上に向けて，学校での指導改善と各家庭での家庭学習の充実は必要不可欠です。

学力向上推進委員会では，各家庭の家庭学習に対する理解と協力，家庭学習の充実に向けた一助となることを願い，土岐市「家庭学習の手引き」小学生版を作成しました。

各学校で手引きや活用の仕方について検討していただき，土岐市の家庭学習の充実に向けて活用していただければ幸いです。

今年度，学力向上推進委員会では，

＜指導改善のポイント＞

考えの深まりや広がりを実感できる振り返りの場
～終末からの授業改善～

＜内容・方法＞

１．考えの深まりや広がりを実感する振り返りの場の工夫
２．思考の過程，自己の変容を振り返ることができるノート整理の工夫
３．自分の考えを相手に伝える，説明する話し合い活動の工夫

に取り組んできました。各校での成果は，以下のようです。

＜成　果＞
○振り返りの場を設定して取り組むことができた。
○教師が終末の時間を意識して授業ができるようになった。
○振り返りカードを作成し，記入させることで，本時の学びを自覚することができた。
○児童自ら授業のまとめをしたり，充実感を味わったりすることができた。
○生徒がより客観的に授業での振り返りができ，知識や考え方の定着が進んだ。
○生徒自身が何がわかって，何がわからないのかを理解できた。

○自分の考えを持てず，黙っている児童が少なくなった。
○仲間の意見をよく聞き，自分の意見が持てる児童が増えた。
○自分の考えを相手に伝え，根拠を明確にして自分の考えを説明できる児童が増えた。
○仲間の考えを取り入れて考えることができるようになった。
○話し合いの中での考えの深まりや広がりを実感する児童が増えた。
○発達段階に応じて，様々な形態を取り入れることで，個々の対話能力が向上した。

上記の各校の成果や平成３０年度「全国学力・学習状況調査」の結果，平成３０年度「土岐市　指導改善プラン」の検証方法から，今年度の活動を検証し，２０１９年度の「土岐市　指導改善プラン」（案）を次頁のように考えてみました。

２０１９年度「土岐市　指導改善プラン」（案）

＜平成 30 年度の検証＞

平成 30 年度「全国学力・学習状況調査」児童生徒質問紙　「当てはまる」の割合

①「授業では，課題の解決に向けて，自分で考え，自分から取り組んでいたと思う。」
　目標値：40%（昨年度：31.0%）　結果：27.0%（小学校：25.1%，中学校：29.1%）

②「授業で，自分の考えを発表する機会では，自分の考えがうまく伝わるよう，資料や文章，話の組み立てなどを工夫して発表していたと思う。」
　目標値：30%（昨年度：15.0%）　結果：21.4%（小学校：22.4%，中学校：20.2%）

③「学級の友達との間で話し合う活動を通じて，自分の考えを深めたり，広げたりすることができている。」
　目標値：30%（昨年度：25.1%）　結果：31.6%（小学校：31.6%，中学校：31.4%）

※①，②は新規の質問項目のため，昨年度の値は相当する項目の値

＜分　析＞

・話し合い活動の工夫をすることで，自分の考えがうまく伝わるように発表を工夫する児童生徒の割合が増えてきた。
・振り返りの場を工夫することで，自分の考えを深めたり，広げたりする児童生徒の割合が増えてきた。
・課題解決に向けて，自分で考え，自分から取り組む児童生徒の割合が低い

➡児童生徒の主体性が低い

＜指導改善のポイント＞

子どもたちが，自分で考え，自分から取り組む授業
～主体性をはぐくむ～

＜重　点＞

１．教える授業から，子どもたちが考える授業へ
２．子どもたちが自ら学ぶ授業
３．子どもたちで，学び合う授業

＜検証方法＞

「全国学力・学習状況調査」児童生徒質問紙　「当てはまる」の割合

①「授業では，課題の解決に向けて，自分で考え，自分から取り組んでいたと思う。」
　目標値：35%

②「授業で，自分の考えを発表する機会では，自分の考えがうまく伝わるよう，資料や文章，話の組み立てなどを工夫して発表していたと思う。」
　目標値：30%

③「学級の友達との間で話し合う活動を通じて，自分の考えを深めたり，広げたりすることができている。」
　目標値：40%

平成３０年度　教育実践論文審査講評

審査員長　泉小学校長　熊﨑　克朗

土岐市の教育方針「子どもを大切にし、学ぶ楽しさのある授業を行い、生きる力をはぐくむ」とその具現に向けた実践課題「学び手の側に立つ学習指導の実現」「仲間とかかわり高めあう力の育成」のもと、その達成を目指して、日々の実践を積み上げてこられた先生方の熱意や努力が論文から伝わってくるものばかりでした。

実践論文に取り組むことは、働き方改革からすると逆行する部分があるかもしれません。しかし、教師としての指導力を磨くという面では大変有効なことですし、結果として、子ども達のためになるということでは、間違いありません。忙しい中で、こうして、応募された先生方の努力に敬意を表します。

審査を終えて、本年度の応募論文の特徴について以下のようにまとめました。

１　応募の状況について

出品数は小学校・中学校ともに１６点で総数３２点でした。昨年度より２点増えています。そして、応募された３２名のうち、７名の方が昨年度に引き続いての応募でした。

内訳は、一般の部の対象が９点、新人賞対象が２３点でした。年代別では２０代が２０点、３０代が７点、４０代が４点、５０代が１点でした。また、教科に関わる論文が全体の約６割で、道徳や特別活動、学級経営といった領域の論文が約４割でした。

教科別に見ると、算数・数学、国語、小学校の外国語活動の作品が多く出品されていました。また、特別支援教育や総合的な学習の時間、健康安全など、広い分野での研究実践がなされていました。

２　教育実践論文の内容について

児童生徒が主体的に学びに向かうことや、仲間との学び合いを大切した実践についての論文が多く、読んでいて児童生徒の様子が目に浮かぶような作品が多くありました。そして、以下のような特徴がありました。

・アンケート等を活用して客観的なデータをとったり、子ども達が書いたまとめの文章等を活用したりして、子ども達の変容を具体的に示した論文が多い。
・主体性や自主性を身に付けさせようとする実践が多い。
・児童生徒が楽しく取り組むために工夫した作品が多かった。
・校内研究と関わらせて取り組まれた論文、新しい教育の方向を捉えた論文が多かった。
・学校体制で支援や応援があり、指導してもらっている論文がほとんどであった。

３　今後に向けて

特に新人の部に応募される方には、以下のようなことを大切にしていただきたい。

今年度、新人賞を受賞された３名の方については、２年連続での応募でした。昨年の論文作成で学んだことを生かして実践され、論文としてまとめられたことが今回の受賞につながったのだと思いました。早いうちに、過去の優秀賞を取ったような論文をいくつか読んで、イメージすることが大切だと思います。そして、事前に、どのようなデータで成果を証明するか、どのような姿を願うのかといった見通しをもって実践に取り組むことを大切にしていただきたい。また、１０ページしか書けませんので、紙面を効果的に活用できるよう何度も論文を読み返して修正したり、先輩に指導してもらったりすると、よりわかりやすく説得力のある論文になっていくと思います。実践資料もきちんと残し、資料として提出するとより説得力が増すと思います。

今後、さらに中堅あるいはベテランの先生も含めた、多くの先生方からの応募を期待し、土岐市の教育が一層充実していくことを願っています。

平成３０年度　土岐市実践記録審査講評

土岐市教育研究所　主任　河合　広映

昨年度より教育実践記録を募集し、今年度で２年目となります。

実践記録の募集は、土岐市立の幼稚園、小学校，中学校教職員の日々の実践を、実践記録としてまとめることを通して、実践的指導力の向上を図ることと、各園・小中学校から応募のあった実践記録を閲覧することを通して、市内の若い先生方の識見を広げ、日々の実践に役立てることを目的としています。実践記録の募集を通して、教師としての実践的指導力の向上を図ることだけではなく、普段なかなか交流することの少ない自校以外の先生方の実践を知る機会、見る機会としていただき、これからの学校教育を担っていく先生方に新たな気づきと教科や学級経営に対する熱意を感じ取っていただければ幸甚です。

１　応募の状況について

今回の募集は、学級通信や職員向け通信の「通信の部」と、教科学習の中で作成した掲示物や教科プリント、児童生徒ノート等の部、それ以外の３部門で募集を行い、初めて担任をもった先生からベテランの先生まで幅広い年齢層の先生方から２１点の応募がありました。

２　実践記録の内容について

通信の部では、先生方の学級や児童生徒に対する熱い思いが伝わってくるものばかりでした。日々の児童生徒の価値ある行動や、その行動の裏にある思い、そして、その値打ちが柔らかな口調で語られ、児童生徒が「ああ、この学級で良かったな」という学級に対する所属意識の高まりや、「自分の行動はあれで良かったんだな」という自己肯定感を抱くことができるような通信ばかりでした。今年度は、紙の通信以外に、日常的に、子どもたちに温かいメッセージを送り続ける黒板通信をまとめたものもありました。子どもたちに一言何か伝えたいという先生の思いを実現する良い工夫だと思います。また、教材の部では教員になりたての時代から現在にかけて、蓄積してきた教材プリントをまとめた作品もありました。「実践記録に応募するにあたり、これを機会にまとめてみようと思いました」と述べられたその先生は、これまで自分が改良を重ねて作ってきた教材を教員人生の宝として大切に大切にしてきたと熱く語ってくれました。

さらに今年度は、通信や教材以外に先生たちが給食時間に子どもたちに語る内容をまとめた共同作品も提出されていました。その学校では先生たちの生活経験の中から、自分が体験してきたことやその時に感じたこと、思ったことを文章にまとめて、順番に話されています。その話を楽しみにしている子どもたちもきっと多くいることでしょう。このような日常的な取組の積み重ねが子どもたちの心の成長につながっているのだと改めて感じることができました。今後、こうした先生たちの共同作品も増えてくることを願っています。

３　今後に向けて

今回はじめて、幼稚園からの応募がありました。幼稚園の園経営や遊びを通した教育活動など小中学校の先生が知らないことは多くあります。アプローチカリキュラムや１０の育てたい姿など幼稚園の先生方の指導から学ぶことは多いと思います。来年度も幼・小・中からの積極的な教育実践による実践記録を期待しています。

「心にひびく言葉」

「ありがとうございます」

西陵中学校　教頭　福田　辰雄

「手伝ってもらってありがとうございました。」「忙しい中、ありがとね。助かりました。」前任校の教頭先生からは、一日に何度も「ありがとう」という言葉が周りの人々に伝えられていました。この教頭先生とは、若い時にいっしょの学年で仕事をさせていただき、お互いのことを知った仲でしたが、以前に比べ、「ありがとう」という言葉を本当にたくさん使われるようになられたなぁと隣にいながら感じていました。

今、同じ立場での仕事に携わり２年目を終えようとしています。仕事の対象が、生徒のこと、学習のこと、施設のこと、職員のこと、保護者のこと、ＰＴＡのこと、地域のことなどとても広くなり、自分自身の力不足から、やることがなかなかうまく進まないことが多々ありました。そんな中、周りの人々に本当にたくさんの面で支えていただき、ここまでこれたなぁとしみじみと思うようになりました。前任校の教頭先生が周りの人々に「ありがとう」の言葉をかけている心情がよく分かりました。「ありがとう」という言葉は、日常生活の中でよく交わされる言葉ですし、自分自身、今まで何度も使ってきましたが、ここへきて改めてその言葉の深さと周りの方々への感謝の気持ちの大切さを感じました。多くの方々に日々支えていただいているからこそ、進むことができます。周りの方々への感謝の気持ちを忘れず、たくさんの「ありがとうございます」を伝え、協力してくださった方々の思いを大切にしながら日々努力していきたいです。

◇土岐市教育実践論文　審査結果

今年度は３２点の応募があり、審査会で下記のように入賞者が決まりました。

《優秀賞》渡邉　草太（土岐津小）〈社会〉

《優良賞》加藤　大貴（下石小）〈総合的な学習の時間〉　稲山　竜太（泉中）〈保健体育〉

《新人賞》粟野　聖崇（土岐津小）〈国語〉　大竹　琴満（土岐津小）〈外国語活動〉

石丸　高綱（肥田小）〈国語〉　渡辺　英弘（泉中）〈道徳〉

《入　選》古田　佳奈（下石小）〈算数〉　安藤　早紀（泉小）〈外国語活動〉

吉村　真美（泉小）〈国語〉　今西　賀寿真（土岐津中）〈数学〉

大宮　笙吾（泉中）〈英語〉　成瀬　公志郎（泉中）〈数学〉

◇土岐市実践記録　審査結果

《教育長賞》泉小学校附属幼稚園全職員〈年間の保育指導記録〉

清水　泰浩・西　雅昭・内田　有美（泉西小）〈道徳性を育むお話タイム〉

樋口　由（肥田小）〈ワークシート集〉　古屋　明莉（肥田中）〈学級通信〉

各務　博紀（泉中）〈黒板通信〉　小池　智明（泉中）〈生徒指導だより〉

※実践記録入賞作品は、来年度の第１回市教研活動日に展示します。